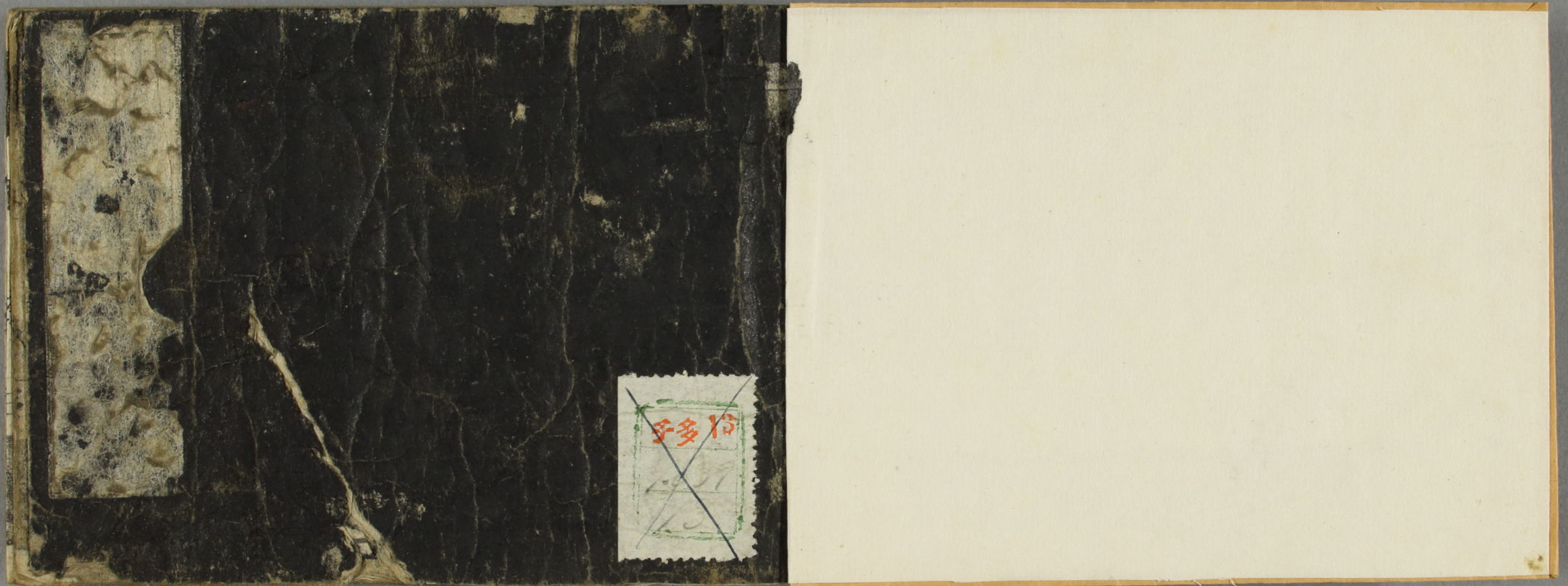
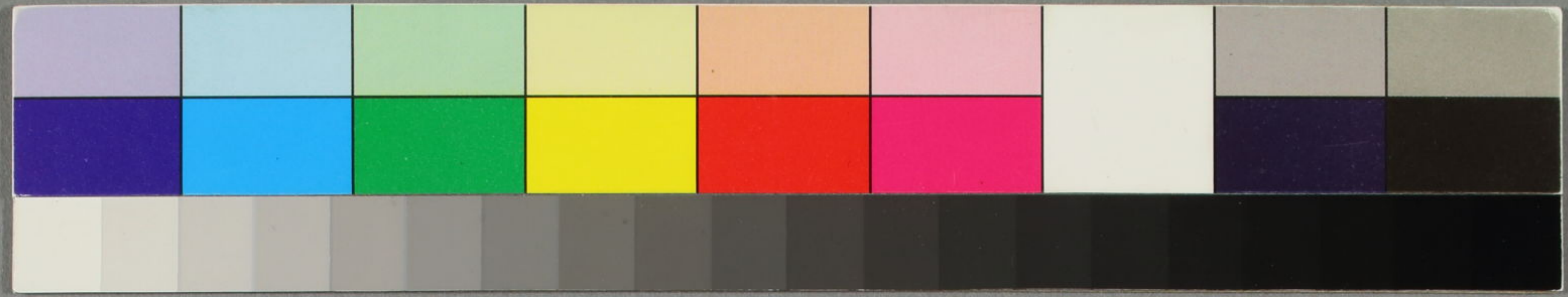


役者評判記

千13
3851
15





~~多字~~



特
門チ 13
3851
巻 15

15

14

後者遊服令 三品定

東の巻 目錄

一富士の物語

青陽の端はらのやみ

春駒の勢いきほひ

のつらくつらいんんををる

顔身世よのよ見物けんぶつぞく

とろとろ入い美み君きみの本ほん衣え



所是を愛小授入者なり

不引よ急立役の弓取

以多相心發こむそん そん

善道の上達者

活判へんくと膏の愛

更愛か愛あくむ 故後獲あけり 退治あひ

名代社奉の苑入へ

榮苑の那那枕

東は徳大寺長也徳者目録

北瀬大長代代 龜安家後 早雲長之次

○見立三區正こよ 山か 谷の 池の 邊
▲故後ま 女ま 故 混雜

大上吉 山三良師 立役

上上吉 中村玄仙 兼兼 兼兼

上上吉 淡尾國清 兼兼 兼兼

上上吉 山岡八 兼兼 兼兼

上上吉 中村秋七 兼兼 兼兼

かゝるふとわゆるしと大山

上上

市川門入殿 兼殿

おもしろくあつてさねのあつた山

上上

佐野川花書門

久しづりでお教を三葉山

上上

桐の若た殿 兼殿

古ひかんでかつひらも花山

上上

富松中殿 兼殿

を以て大づんおんこが西葉山

上上

市川市若殿 兼殿

立役と兼殿とつうとけの兼役

上上

嵐福雲 兼殿

しと長とつてのやうなは多のん

上上

三井他人 兼殿

だんくとおとキが兼役

上上

市川市若殿 兼殿

上上

桐蔭殿 兼殿

えんおまがうてあつて兼役

上上

中山みどり 兼殿

がごん付へてあつて兼役

上上

岩井扇殿 兼殿

はなへおんあつて兼役

上上

市川市若殿 兼殿

とんとおまの氣持は兼役

上上

中村おのへ 兼殿

そのあつてあつて兼役

上上

山嵐殿 兼殿

とつてあつて兼役

上上

三井市若殿 兼殿

ゆをあつて兼役

上上

後尾園殿 兼殿

えんおのあつて兼役

上上

坂東市若殿 兼殿

えんおのあつて兼役

上

坂東義右衛門

三人ともお熱のうへぬらう味

上

中山喜右衛門

市川淡路

いつてもおまろいぬ常山

上

山嵐源三郎

お役者へいせうしりあづき

上

及川喜右衛門

藝の仕うへいせうしりあづき

依の川村代

中村妻代

いせうしりあづき

中山忠右衛門

舞臺いせうしりあづき

三柿栄三郎

先き厚いせうしりあづき

淡路園九郎

お役

上 上 上

いせうしりあづき

上

坂東忠右衛門

上

市川喜右衛門

上

中村喜右衛門

上

中村喜右衛門

上

山嵐忠右衛門

上

中山吉右衛門

上

山嵐忠右衛門

上

中山喜右衛門

上

中山新九郎

上

中山新九郎

上

娘形子役三郎

上

山嵐喜右衛門

上

末美共のいせうしりあづき

上

山嵐忠右衛門

上

いせうしりあづき

上

中村喜右衛門

上

いせうしりあづき

上

いせうしりあづき

上

いせうしりあづき

山嵐雅三郎

市川金三郎

嵐金女

嵐石左衛門

坂東徳兵衛

中村雲之助

山下徳兵衛

嵐子子八

嵐佑木三

嵐才九郎

市川升三女

中村雲之助

尾上法郎吉

三升徳之助

津山由之助

市川紅花

▲頭取之部

山嵐多平郎

山嵐仙三郎

心西人持左衛門の世話を公認

▲熱色世

上上吉

市川熊十郎 變換

美八日しくまのりる 浅草山

▲難子方之部

張竹山巻巻二載 文平清八

口 湖光八尺布 一と小田乃吉

中村又十郎

花柳又十郎

夏五田平又郎

和田竹八

岩村七之助

小川島重

小雲文吉

岩村六吉

竹中兵衛

岩村吉右衛門

志根若居八

於志良三郎

中田若吉

竹幸式吉夫

志根乃茂

口 糸代富美

本根若英女

一藤巻 志根若英女

大船元三郎

口 七雲

辰乃大郎

▲担任作者之部

色雲若英

宗河十吉

宗河若吉

近雲若英

宗河元

藤本若英

十左助改

宗河若英

○この山形は上野の山形郡と世角は総て山形
ありありとく南朝の山形二月三日あり
山形を山形と云ふは山形を山形と云ふは山形

治録

南朝天皇孫代 都 乃を夫
存世天皇孫之孫

上上吉 ▲ 故後天皇孫 深羅

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上吉 山嵐小太 天皇孫

上上

坂東重太郎 三後

上上

先づ〜 坂東重太郎

上上

仕内へ〜 坂東重太郎

上上

先づ〜 入後山

上上

さ〜 大岩方五郎

上上

さ〜 山岡周十郎

上上

さ〜 尾上多之助

上上

さ〜 仲山仙之助

上上

さ〜 山岡重太郎

上上

お二人〜 松尾山

上上

上 法尾重太郎 上 村重太郎

上上

上 山岡重太郎 上 小川重太郎

上上

上 仲山久七 三後

上上

上 大岩方五郎 三後

上上

上 法尾重太郎 三後

上上

上 中村重太郎 三後

上上

上 山岡重太郎 三後

上上

上 山岡重太郎 三後

上上

上 山岡重太郎 三後

上上

上 山岡重太郎 三後

狂言此者之教

其本意... 宗河正成

宗河正成

千秋百歲樂科

照天言清山淨庵居士

西恩寺

乃附去を... 此花こそ... 彼... 乃... 乃... 乃...

遊宴乃夜話

列中... 乃... 乃... 乃...

庭を冷銀乃... 乃... 乃... 乃...

と尖人... 乃... 乃... 乃...

宵光の者... 乃... 乃... 乃...

の... 乃... 乃... 乃...

死を... 乃... 乃... 乃...

有の... 乃... 乃... 乃...

有徳金... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃...

その果敢なる教の發端すまの序
兼ふくす文の大端近の致方感
興あつたものと見えて居るに
よりたゞとて上高年遠慮あり
者なる方とてありて其の事
本意と違ふと云ふの如し
言もくとも其の意を以て
吾未と改せの如し
のこゝろに
見物遊覧の件
を集りての
振あつて
自在。彼の
の如し

皆今更樂化を嘗て
くと昔の
只今
念は
まど
是
海
有
全
全
也

大醫局の傳る所也伊の守りは六之
 野々子及ては是れ花の房なるものなり
 又その花の房は花の房なるものなり
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる

花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの
 又花の房なるものは花の房なるもの
 夫れが花の房なるものは花の房なる
 花の房なるものは花の房なるもの

あるが、所感力も、はたはたの極に
一宵の夢をたてると、とては、いかに
おぼろぎの夢を、はたはたの極に
らむ先、結ぶに、夢の極を、とては、いかに
まゝの切は、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
長なると、いかに、夢の極を、とては、いかに
の、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
世に、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
まゝの切は、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
あまの、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
すも、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
九、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
あれ、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
あり、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに

文政三年 作者 自笑
日かひ月書 毒松軒 泊筆

大十吉 山嵐 而 三奴

左の、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
か、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
改、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに
か、夢の極を、とては、いかに、夢の極を、とては、いかに

其の目録を案せしむるに諸公の志が
 甚しくばなり勤王の志^一 隆慶の志^二
 志は其の人心に在り其の志は其の心
 心^三 隆慶の志^四 隆慶の志^五
 隆慶の志^六 隆慶の志^七 隆慶の志^八
 隆慶の志^九 隆慶の志^十 隆慶の志^{十一}
 隆慶の志^{十二} 隆慶の志^{十三} 隆慶の志^{十四}
 隆慶の志^{十五} 隆慶の志^{十六} 隆慶の志^{十七}
 隆慶の志^{十八} 隆慶の志^{十九} 隆慶の志^{二十}
 隆慶の志^{二十一} 隆慶の志^{二十二} 隆慶の志^{二十三}
 隆慶の志^{二十四} 隆慶の志^{二十五} 隆慶の志^{二十六}
 隆慶の志^{二十七} 隆慶の志^{二十八} 隆慶の志^{二十九}
 隆慶の志^{三十} 隆慶の志^{三十一} 隆慶の志^{三十二}
 隆慶の志^{三十三} 隆慶の志^{三十四} 隆慶の志^{三十五}
 隆慶の志^{三十六} 隆慶の志^{三十七} 隆慶の志^{三十八}
 隆慶の志^{三十九} 隆慶の志^{四十} 隆慶の志^{四十一}
 隆慶の志^{四十二} 隆慶の志^{四十三} 隆慶の志^{四十四}
 隆慶の志^{四十五} 隆慶の志^{四十六} 隆慶の志^{四十七}
 隆慶の志^{四十八} 隆慶の志^{四十九} 隆慶の志^{五十}

隆慶の志^{五十一} 隆慶の志^{五十二} 隆慶の志^{五十三}
 隆慶の志^{五十四} 隆慶の志^{五十五} 隆慶の志^{五十六}
 隆慶の志^{五十七} 隆慶の志^{五十八} 隆慶の志^{五十九}
 隆慶の志^{六十} 隆慶の志^{六十一} 隆慶の志^{六十二}
 隆慶の志^{六十三} 隆慶の志^{六十四} 隆慶の志^{六十五}
 隆慶の志^{六十六} 隆慶の志^{六十七} 隆慶の志^{六十八}
 隆慶の志^{六十九} 隆慶の志^{七十} 隆慶の志^{七十一}
 隆慶の志^{七十二} 隆慶の志^{七十三} 隆慶の志^{七十四}
 隆慶の志^{七十五} 隆慶の志^{七十六} 隆慶の志^{七十七}
 隆慶の志^{七十八} 隆慶の志^{七十九} 隆慶の志^{八十}
 隆慶の志^{八十一} 隆慶の志^{八十二} 隆慶の志^{八十三}
 隆慶の志^{八十四} 隆慶の志^{八十五} 隆慶の志^{八十六}
 隆慶の志^{八十七} 隆慶の志^{八十八} 隆慶の志^{八十九}
 隆慶の志^{九十} 隆慶の志^{九十一} 隆慶の志^{九十二}
 隆慶の志^{九十三} 隆慶の志^{九十四} 隆慶の志^{九十五}
 隆慶の志^{九十六} 隆慶の志^{九十七} 隆慶の志^{九十八}
 隆慶の志^{九十九} 隆慶の志^{一百}

柳の底をせよと邪の人のしたるは
 といわれ九井の[殿]に居るは柳の
 須藤と名にたて置るは久遠の[夜]
 左の[柳]の[切]別とまの[夜]終とて
 之を[坐]まうと法に[柳]の[夜]別[柳]
 須藤と名にたて置るは久遠の[夜]
 ねて[柳]の[身]の[夜]終とて[夜]
 対は[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 本より[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 柳とて[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 ひん[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 腹まの[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 云の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 之を[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]

一七 [夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 之を[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 切の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 ねて[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 之を[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 切の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 ねて[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 之を[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 切の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 ねて[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 之を[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 切の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 ねて[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 之を[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]
 切の[夜]終とて[夜]の[夜]終とて[夜]



切替 留春妓女客性 上中下



留春妓女客性 上中下

是時聖德太子が新羅の地を
小碓臣改新羅の地を
大碓臣改新羅の地を
付て新羅の地を
よのく新羅の地を
新羅の地を
あつたを
はの地を
二夜場
百五
切
九
切
切
上

存の目 夜露の似は雀が十羽さるるこゝろ
また赤て白弁が是れさるる鳥の生れ
此の鳥は物言ひのうつくしき鳥なり
十羽と六と十とある様を六羽指して鳥

【イキ】 谷越へ出さるる鳥の姿をさるる鳥

ぬまのひひをさるる鳥の姿をさるる鳥

山あなを越えたる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

赤鳥をさるる鳥の姿をさるる鳥

長らくおき内記三條をてりておき
世風長く西三つをてりておき
小和は又々とはいふ所の五人の外
公角の所を時時青の傳之文を六切記
云々金巻全るいれりていふ所を
頃々書ひていふ所の云々後傳の村の端も
然りて又外に記し不承の傳の末の事
二條の云々ある邊ひて外に三條の事
知事の事ある所のいふ所の事ありて
まを承知してと事ありておき
はさるる心ありて
上上 回 市川南橋口

上上 回 市川南橋口
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり

水出位銀花雲浦を平三條の砂地
より新地にて文納傳よりいふ事あり
て云々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
在承と云々此の事ありて事ありて
櫻井修好と夫は云々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
云々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
八陣と云々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
事の云々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
云々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
増々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
の月々 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり

上上 山岡 [後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり
[後] 痛がき 羽扇の比紙一枚をてり

角の尾(お角)とて八階まで切られ
来た。その意は、その意は、
印(お角)は、お角とて、お角とて、

上上 三杯先人 三夜

【啓】東の美言は、
【川】金持の仕立は、
【山】全待の仕立は、
【那】の仕立は、
【多】の仕立は、
【山】の仕立は、
【後】の仕立は、
【の】の仕立は、
【本】の仕立は、
【く】の仕立は、

上上 市川市

【啓】その意は、
【之】の仕立は、
【本】の仕立は、
【多】の仕立は、
【山】の仕立は、
【後】の仕立は、
【の】の仕立は、
【本】の仕立は、
【く】の仕立は、

上上 相持後

【啓】相持は、
【の】の仕立は、
【本】の仕立は、
【多】の仕立は、
【山】の仕立は、
【後】の仕立は、
【の】の仕立は、
【本】の仕立は、
【く】の仕立は、

上上 中山

【啓】中山は、
【の】の仕立は、
【本】の仕立は、
【多】の仕立は、
【山】の仕立は、
【後】の仕立は、
【の】の仕立は、
【本】の仕立は、
【く】の仕立は、

本姓の事は仰天候の事は極く少く
 金平の事は極く少く
 本姓の事は仰天候の事は極く少く
 金平の事は極く少く
 本姓の事は仰天候の事は極く少く
 金平の事は極く少く

上中 甲 岩井扇松三三
 乙 岩井扇松三三
 丙 岩井扇松三三
 丁 岩井扇松三三
 戊 岩井扇松三三
 己 岩井扇松三三
 庚 岩井扇松三三
 辛 岩井扇松三三
 壬 岩井扇松三三
 癸 岩井扇松三三

上中 乙 岩井扇松三三
 丙 岩井扇松三三
 丁 岩井扇松三三
 戊 岩井扇松三三
 己 岩井扇松三三
 庚 岩井扇松三三
 辛 岩井扇松三三
 壬 岩井扇松三三
 癸 岩井扇松三三

上中 丙 岩井扇松三三
 丁 岩井扇松三三
 戊 岩井扇松三三
 己 岩井扇松三三
 庚 岩井扇松三三
 辛 岩井扇松三三
 壬 岩井扇松三三
 癸 岩井扇松三三

上中 丁 岩井扇松三三
 戊 岩井扇松三三
 己 岩井扇松三三
 庚 岩井扇松三三
 辛 岩井扇松三三
 壬 岩井扇松三三
 癸 岩井扇松三三

上中 戊 岩井扇松三三
 己 岩井扇松三三
 庚 岩井扇松三三
 辛 岩井扇松三三
 壬 岩井扇松三三
 癸 岩井扇松三三

上中 己 岩井扇松三三
 庚 岩井扇松三三
 辛 岩井扇松三三
 壬 岩井扇松三三
 癸 岩井扇松三三

あはれおかしき結文のたまはしきふとせしむる
及孫之の升とて高利取よる升其まを
いふの事もあつたふとのいふはまことち
付利の事もあつたふとのいふはまことち
まのいふや父の事もあつたふとのいふはま
よとよるあつたふとのいふはまことち
今よりいふ事もあつたふとのいふはまことち

あはれおかしき結文のたまはしきふとせしむる
及孫之の升とて高利取よる升其まを
いふの事もあつたふとのいふはまことち
付利の事もあつたふとのいふはまことち
まのいふや父の事もあつたふとのいふはま
よとよるあつたふとのいふはまことち
今よりいふ事もあつたふとのいふはまことち
あはれおかしき結文のたまはしきふとせしむる
及孫之の升とて高利取よる升其まを
いふの事もあつたふとのいふはまことち
付利の事もあつたふとのいふはまことち
まのいふや父の事もあつたふとのいふはま
よとよるあつたふとのいふはまことち
今よりいふ事もあつたふとのいふはまことち

あはれおかしき結文のたまはしきふとせしむる
及孫之の升とて高利取よる升其まを
いふの事もあつたふとのいふはまことち
付利の事もあつたふとのいふはまことち
まのいふや父の事もあつたふとのいふはま
よとよるあつたふとのいふはまことち
今よりいふ事もあつたふとのいふはまことち
あはれおかしき結文のたまはしきふとせしむる
及孫之の升とて高利取よる升其まを
いふの事もあつたふとのいふはまことち
付利の事もあつたふとのいふはまことち
まのいふや父の事もあつたふとのいふはま
よとよるあつたふとのいふはまことち
今よりいふ事もあつたふとのいふはまことち

其の先一やをてある物ありて其の先を
てし秋を先かふとて秋ありて其の先を
しと云ふなりあるとて秋ありて其の先を
七後世の先ありて其の先を今とて其の先を

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

其の先を其の先とて其の先を其の先とて

を合しこれに流尾重の...
[1] 上言の利め...
[2] 上言の利め...
[3] 上言の利め...
[4] 上言の利め...
[5] 上言の利め...
[6] 上言の利め...
[7] 上言の利め...
[8] 上言の利め...
[9] 上言の利め...
[10] 上言の利め...

上上言  後川花衣

川林 福丸...
[1] 川林 福丸...
[2] 川林 福丸...
[3] 川林 福丸...
[4] 川林 福丸...
[5] 川林 福丸...
[6] 川林 福丸...
[7] 川林 福丸...
[8] 川林 福丸...
[9] 川林 福丸...
[10] 川林 福丸...

川林 福丸...
[1] 川林 福丸...
[2] 川林 福丸...
[3] 川林 福丸...
[4] 川林 福丸...
[5] 川林 福丸...
[6] 川林 福丸...
[7] 川林 福丸...
[8] 川林 福丸...
[9] 川林 福丸...
[10] 川林 福丸...

公の概を承りて人給深きこと一重に交
はるる後定て其の一事を記述せしむる由
余陸方様出しくしす

○中野の角平次郎の故也
上止 ⑤ 淡尾万吉様始り

○陸方万吉様は山形に居りて是を方定と云
てその方定は公の孫也故に公の孫と云ふ

上止 ⑥ 中村金之助様

○其の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は

中山外之助

山崎藤之助

中山綱正

○其の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は

上止言 ⑦ 大森吉右衛門

○其の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は

明石吉右衛門

○其の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は
公の孫の孫と云ふは公の孫也其の孫は

上止言 ⑧ 大森吉右衛門

上より入る **四** 諸君は之を以て和同美徳を
言はば切敷きと云はれども其言を以て

四 美徳は之を以て和同美徳と云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

美徳の言はば切敷きと云はれども其言を以て

右の段を後へ長く作る所へ移す
家くくくく家の花もさうなるに
多二まゝ其の飛ひと一筋ま

待たせり

八文舎
自笑

森校新

治野馬

文政三卯

正月吉日

書林

八文舎左の板
河内屋大板

後者遊眼合 京の巻終

文政
巳卯

後者校對合大坂

後者優眼合 藝不定

大坂巻目録

二府の言ふたつのことばの言ことばの言ことば

勢いきさつひたういさぎの世よの鶴つる

大郡會おほしほの形かたちを

のまきのまき自みづか查しらの名人めいじん

え切きり者ものの仕し内うちの

善よき悪わるの元もと生なまを移うつ目め録ろく

見物へ木戸札を

冥てえらるるその日

上上の暮らさる

暇々ある十八公

物言る実を今

我を忘るに在る糸

座中娘を狂言

あつと結に服合

大坂大芝居敷後者目録

道頓堀の芝居元代

〇見立二番者より名づけたる匠

〇江戸市南附縁の并に城の跡をみる

大坂次 ▲ 敷 巻 頭

至上書 浅尾五右衛門

依る所の中七も勢ひのよる

▲ 立 渡 文 部

至上書 市川市丸

よく味とくの笑えり

至上書 山嵐猪之席

うへへすをりこある

至上書 小川若老席

色々の解え字のよる

上上中 中山一蝶

まへへんくのやんま

上上 嵐橋之席

を 上上

上上

下多々小島うのさる 鷲

移山田神三 仲左

志入山西又志入のさる 鷲

上上

布川虎爺 〇

折くへ原也のさる 鷲

上上

山嵐徳三爺 〇

先づあつたが井上 鷲

上上

行岡長十爺 〇

志入付の父方志入のさる 鷲

上上

濱尾志三爺 仲

元持の父方志入のさる 鷲

上上

笠巻又九爺 〇

志入の父方志入のさる 鷲

上上

行岡十爺 〇

今の内へ志入の 〇

上上

山嵐國守爺 〇

上上

山嵐林之中

上上

小川志次 〇

上上

中村紋三爺 〇

上上

志入志三爺 〇

上上

志入志三爺 〇

上上

中山文七 仲左

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

志入のさる 鷲

上上

松幸彦十郎

子守の仕をへんとてへん上公

上ト

大老の心算

才るるへんをへん遠へん子

上ト

淡路の十神

うらごの女衆の女衆

上上

左弁花車形之紋

あつてくへ女衆の女衆

上吉

美女形之部

嵐小六

上上吉

嵐かみ

あつてくへ女衆の女衆

上上吉

萩野海子

あつてくへ女衆の女衆

上上

嵐海光

は内へん女衆の女衆

上上

河内國守

先おはるへん女衆の女衆

上上

淡村徳義

おはるへん女衆の女衆

上上

河内海子

あつてくへ女衆の女衆

上上

淡路徳之助

一寸の女衆の女衆

上上

河内海子

大分わたりへん女衆の女衆

上上

三井橋

あつてくへ女衆の女衆

上ト

河内海子

あつてくへ女衆の女衆

上ト

淡路徳之助

あつてくへ女衆の女衆

上ト

嵐海光

あつてくへ女衆の女衆

上上

尾上桑葉

おまへへあつてはるる葉

上上

芳候いちは

どうく候りかあつてはるる葉

上上音

山嵐

さふりてはるる葉

上上音

中村

けんのあつてはるる葉

▲ 娘 子 後 之 歌

上上

浪 走 之 節

おれはあつてはるる葉

上上

嵐 走 之 節

尾上あつてはるる葉

上

浪 走 之 節

先んあつてはるる葉

上

嵐 走 之 節

あつてはるる葉

小川 葉 之 節

尾上あつてはるる葉

浪 走 之 節

尾上あつてはるる葉

中 山 葉 之 節

嵐 走 之 節

浪 走 之 節

尾上あつてはるる葉

中 山 葉 之 節

浪 走 之 節

尾上あつてはるる葉

竹 中 葉 之 節

嵐 走 之 節

尾上あつてはるる葉

山 嵐 走 之 節

尾上あつてはるる葉

山 嵐 走 之 節

尾上あつてはるる葉

尾上あつてはるる葉

尾上あつてはるる葉

尾上あつてはるる葉

く君進シでス可ク務ム事ヲ為シてハ又ハ發シ

去リ而シ則チ其レ長ク之レ憂ヲ為ス也ハ極メ其レ後ニ

亦シ之レ任任之レ事ヲ以テ意ヲ相合ふル也ハ并ニ一ヲ與ル

也ハ子ノ行ハ子ノ善ク也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ

中ニ也ハ中ニ也ハ子ノ善ク也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

使ス之レ也ハ父ノ之レ也ハ父ノ之レ也ハ子ノ之レ也ハ子ノ

去去角の片之自來角の板が勸夜
カノ子に親父の衣板が家番と云ふ
千一坊の赤い子に親父の衣板が家番と云ふ

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕
〔衣板が家番と云ふ〕

加て山中に置かれしは、不意に其の
の故に其の心を奪はれし事あり。[一] 則ち
自ら彼を以て因りて其の場を以て其の
[二] 故に其の場を以て其の場を以て其の
彼地を以て其の場を以て其の場を以て
[三] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[四] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[五] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[六] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[七] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[八] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[九] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[一〇] 故に其の場を以て其の場を以て其の

上上

○ 中山一蝶 日

トイキ 私に在りし時、其の心を奪はれし事あり。[一] 則ち
自ら彼を以て因りて其の場を以て其の
[二] 故に其の場を以て其の場を以て其の
彼地を以て其の場を以て其の場を以て
[三] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[四] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[五] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[六] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[七] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[八] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[九] 故に其の場を以て其の場を以て其の
[一〇] 故に其の場を以て其の場を以て其の

飛鳥の羽は下に集りて其の切
羽の下の羽は下に集りて其の切
羽の下の羽は下に集りて其の切
羽の下の羽は下に集りて其の切
羽の下の羽は下に集りて其の切

上上



嵐鳥の羽

竹林の羽は下に集りて其の切
竹林の羽は下に集りて其の切
竹林の羽は下に集りて其の切
竹林の羽は下に集りて其の切
竹林の羽は下に集りて其の切

上上



横山屋神三

同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切

上上



市川虎秀

同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切

上上



山見留之神

同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切
同人の羽は下に集りて其の切

三ノ集切の御書は、余等が御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書

上十 ① 乃圖十書 〇

三ノ集切の御書は、余等が御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書

上十 ② 乃圖十書 〇

三ノ集切の御書は、余等が御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書

上十 ③ 乃圖十書 〇

三ノ集切の御書は、余等が御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書

上十 ④ 乃圖十書 〇

三ノ集切の御書は、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書

上上言 ⑤ 乃圖十書 〇

三ノ集切の御書は、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書
之自來、書之御書、余等が御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書、御書

多... 之自... 分... 其... 若... 命... 身... 報... 女... 史... 升... 孫... 勿... 梅... 早... 法... 精... 志... 上上吉



山風冠士

中吉

志... 命... 身... 報... 女... 史... 升... 志... 命... 身... 報... 女... 史... 升...



山猫
涉尾去方
小川
大八
去方
山猫
涉尾去方
小川
大八
去方
山猫
涉尾去方
小川
大八
去方

此の松は...
 松の葉は...
 松の皮は...
 松の根は...
 松の實は...
 松の種は...

上上 松葉湯 沖庄

此の湯は...
 松葉を...
 湯に...
 煮...
 飲...

此の湯は...
 松葉を...
 湯に...
 煮...
 飲...

上上 松葉湯 沖庄

此の湯は...
 松葉を...
 湯に...
 煮...
 飲...

の意をどうも後教の結構のつぎに、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
中、本邦の上り下り、〔図〕と云ふべきもの、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
の意の結構あり

上上  相成るべき 

〔図〕 本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
中、本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
の意の結構あり

上上  本邦の上り下り 〔中〕

此の意のまゝに海に出るに相成るべき
中、本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
の意の結構あり

上中  法尾軍中 〔中〕

〔図〕 本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
中、本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
の意の結構あり

▲ 海外の意の結構

上上  法尾軍中 〔中〕

此の意のまゝに海に出るに相成るべき
中、本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
の意の結構あり

〔図〕 本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
中、本邦の上り下り、
其の意のまゝに海に出るに相成るべき
の意の結構あり

既而...
[外]...
[我]...
[此]...
[彼]...
[上]...
[下]...
[中]...
[左]...
[右]...

既而...
[外]...
[我]...
[此]...
[彼]...
[上]...
[下]...
[中]...
[左]...
[右]...



上上音
後...
二

日吉松の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉

正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉

上上座



山嵐 徳光 仲

正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉
正倉堂の正倉堂の心は外に及ぶる日吉

て名賢如く山中常と夜道の方をぞん
[松] 宿願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに
[名] 賢如く山中常と夜道の方をぞん
[宿] 願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに
[名] 賢如く山中常と夜道の方をぞん
[宿] 願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに
[名] 賢如く山中常と夜道の方をぞん
[宿] 願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに

上上 行國傳家

先生の法門を回柱として、
[松] 宿願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに
[名] 賢如く山中常と夜道の方をぞん
[宿] 願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに
[名] 賢如く山中常と夜道の方をぞん
[宿] 願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに
[名] 賢如く山中常と夜道の方をぞん
[宿] 願の成る所は後刻のふくまひ
[天] 勢地半死して淡路のふくまひ切敷
[何] 人の心は後刻のふくまひに

諸侯の... 治村郷長 中

上上 ④ 可 取 不 門

上上 * 浅尾 徳 三 門

上上 ⑤ 戸 田 忠 三 門

上上 三 井 後 忠 門

⑥ 乃 須 六 井 後 久 二 之 以 家 不 友

等類皆入後天藥之類也凡此等類皆入
上上 晶 乃同山石也

或角質之類也凡此等類皆入
之入等類皆入後天藥之類也

上上
○ 淡庵者謂之
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

或角質之類也凡此等類皆入
之入等類皆入後天藥之類也

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

上上
○ 虎上者謂之
○ 山嵐者謂之

又公家者其意如何公家大教之司也
公家者其意如何公家大教之司也
公家者其意如何公家大教之司也

上上



法皇御衣

上上



法皇御衣

上上



法皇御衣

賢千之教之公家大教之司也

○其外之五州之兵日月海之ありあり

▲ 抄 卷 地

右



法皇御衣

上上 抄 卷 地 中座
上上 抄 卷 地 中座
上上 抄 卷 地 中座

上上 抄 卷 地 中座
上上 抄 卷 地 中座
上上 抄 卷 地 中座

此の書は...
 家^三...
 一...
 二...
 三...
 四...
 五...
 六...
 七...
 八...
 九...
 十...
 十一...
 十二...
 十三...
 十四...
 十五...
 十六...
 十七...
 十八...
 十九...
 二十...
 二十一...
 二十二...
 二十三...
 二十四...
 二十五...
 二十六...
 二十七...
 二十八...
 二十九...
 三十...
 三十一...
 三十二...
 三十三...
 三十四...
 三十五...
 三十六...
 三十七...
 三十八...
 三十九...
 四十...
 四十一...
 四十二...
 四十三...
 四十四...
 四十五...
 四十六...
 四十七...
 四十八...
 四十九...
 五十...
 五十一...
 五十二...
 五十三...
 五十四...
 五十五...
 五十六...
 五十七...
 五十八...
 五十九...
 六十...
 六十一...
 六十二...
 六十三...
 六十四...
 六十五...
 六十六...
 六十七...
 六十八...
 六十九...
 七十...
 七十一...
 七十二...
 七十三...
 七十四...
 七十五...
 七十六...
 七十七...
 七十八...
 七十九...
 八十...
 八十一...
 八十二...
 八十三...
 八十四...
 八十五...
 八十六...
 八十七...
 八十八...
 八十九...
 九十...
 九十一...
 九十二...
 九十三...
 九十四...
 九十五...
 九十六...
 九十七...
 九十八...
 九十九...
 一百...

校正書 〇 〇 〇

上...
 下...
 中...
 左...
 右...
 前...
 後...
 内...
 外...
 上...
 下...
 中...
 左...
 右...
 前...
 後...
 内...
 外...

ありて言者なりとの場之極のまゝにされ
 しゆつとのまゝにせしむる也 二
 後世に或る所は汗ありてのまゝにされ
 たりしがれり 三 升のいとはありてあり
 い 四 升の二枚を母をまはし上の目
 と 五 升の二枚を鬼をまはし上の目
 のまゝにまゝ久しと後升の二枚を母を
 たり 六 升の二枚を母をまはし上の目
 升の 七 二枚を母をまはし上の目
 升の 八 二枚を母をまはし上の目
 升の 九 二枚を母をまはし上の目
 升の 十 二枚を母をまはし上の目
 升の 十一 二枚を母をまはし上の目
 升の 十二 二枚を母をまはし上の目
 升の 十三 二枚を母をまはし上の目
 升の 十四 二枚を母をまはし上の目
 升の 十五 二枚を母をまはし上の目
 升の 十六 二枚を母をまはし上の目
 升の 十七 二枚を母をまはし上の目
 升の 十八 二枚を母をまはし上の目
 升の 十九 二枚を母をまはし上の目
 升の 二十 二枚を母をまはし上の目

文政三年

卯年正月吉日

作者 八文舎 雨笑
書林 雨笑
流 鴛鴦

節園画

姉妹達大礎

全部七冊

右に後者より言入後者正月吉日
卒少くは付不也余以死すべし

後者後服命 大坂老也

冬冬の日

因に

後者後服命 大坂老也
文政三年正月吉日
卯年正月吉日
卒少くは付不也余以死すべし
後者後服命 大坂老也

上上言 尾上重太郎
上上言 坂本重太郎
上上言 義経仙系
上上言 行圓仁之命
上上言 写聖松山寺
上上言 市川市彦

上上言 市川市彦
上上言 写聖松山寺
上上言 行圓仁之命
上上言 義経仙系
上上言 坂本重太郎
上上言 尾上重太郎

上上

市川新巻

弓ふのりうそりかふいじり

上上

嵐巻糸糸

おせのつあえついこつて

上上

嵐巻糸糸

かゆくまていおらうがいのり

上上

行國巻糸糸

を以て実と故の 二つ見

上上

嵐巻糸糸

よりがくかういんえいふり

上上

坂巻糸糸

はびらひのそりあひき

上上

行國巻糸糸

上上

坂巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上上

尾上巻糸糸

上 市川渡彦 一上 坂本岩田彦
上 市川三兵衛 一上 丹波の守彦
上 沢村政之助 一上 大友彦彦彦
上 市川三郎 一上 浅尾彦彦彦
上 市川三郎 一上 市川三郎彦彦彦
上 市川三郎 一上 市川三郎彦彦彦
上 市川三郎 一上 市川三郎彦彦彦
上 市川三郎 一上 市川三郎彦彦彦

頭取之巻

上 市川渡彦

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 市川三郎

上 下

岩井徳彦所
少でとあひのりたのりたのりた

上

中村仙太郎

上

三井小次郎

上

長崎ひかき

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上

長川小次郎

上上吉

尾上景重所

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

寛政の初日にもあつた後尾上景重の

千穂景重所

梅名目 一

本家名は山形河川に流るる梅名目

梅名目 二

梅名目 三

梅名目 四

梅名目 五

梅名目 六

梅名目 七

梅名目 八

梅名目 九

梅名目 十

梅名目 十一

梅名目 十二

梅名目 十三

梅名目 十四

梅名目 十五

梅名目 十六

梅名目 十七

梅名目 十八

梅名目 十九

梅名目 二十

梅名目 二十一

梅名目 二十二

梅名目 二十三

梅名目 二十四

梅名目 二十五

梅名目 二十六

梅名目 二十七

上上 回 市川新巻

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

上上 崑崙山

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

上上 壬山 一五八

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

上上 崑崙山

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

上上 尾上巻線

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

上上 大巻小巻

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

上 尾上巻線

此巻は徳三山登道巻も其時同く其巻を解
 する程其後の縁起も其後巻の縁起の抄書其
 段巻を其巻の縁起の巻に綴りて置く

支
卯
後者億面今江戶

役者優面合

巻六

江戸之巻 目錄

三茄子の正さんあずび ままごゆあ及ハ

くくまごととまご志しのの上うへ言ご

切きりととのの六む真ま真ま

至いたるる大おほ立た者もの

由ゆ及あままとと入いるる

目録ひめい役者やくしやのの正ま及あハは

牛乳のきんぎょ

丁鬼の孫むりの

眼次と夜と

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝの

おぼろのまゝ

まゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝ

江戸三層熱湯

塚町 中村劫三斎座

菅原町 西川彦十斎座

本橋町 ○まゝのまゝのまゝ

○まゝのまゝのまゝ

▲熱巻頭

極上吉

まゝのまゝのまゝ

▲まゝのまゝ

▲まゝのまゝ

市川園十斎

上上吉

園三十斎

上上吉

坂東彦三斎

上上吉

坂東義勝

上上吉

市山七虎

上上士

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川門三郎

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川源三郎

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上言

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上言

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上言

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上言

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上言

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上士

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

上上

老芋のやうに後を慕ふものなり
市川辰之丞

木

相持強志の仲村

今ひなを云ふ所迄の名をいふべし

上 沢村川為 玉川

あつむをあらはれりするをいふ

上 沢村紀保 仲村

らゝが今ひのやうにいふはあやふ

上 市川の助 仲村

まをいふくつとあつて相持示

上 松平守平 玉川

あつむをいふていふはあやふ

上 市川園吉 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 三平 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 中村平次郎 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 松平深谷 玉川

あつむをいふていふはあやふ

上 松三郎 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 松井族之助 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 坂東園吉 玉川

あつむをいふていふはあやふ

上 淡尾忠太郎 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 坂東寺持 玉川

あつむをいふていふはあやふ

上 市川門助 仲村

あつむをいふていふはあやふ

上 沢村長之助 玉川

あつむをいふていふはあやふ

上 相持強志 仲村

あつむをいふていふはあやふ

全

2

上
坂東村系 五川
実子よりうきれきうまの系

坂東村系 中村
おちの後のあまの系

坂東村系 五川
秋枝能義

坂東村系 中村
招ふの系

市川系 五川
千重ひとち華金八里の系

秋枝能義 大出金平二玉
坂東村系 中村

坂東村系 中村
十虎 中村系

坂東村系 中村
山嵐三九郎 坂東村系

坂東村系 中村
実系 十虎 中村系

上上士
秋枝能義 大出金平二玉

上上
坂東村系 中村
あやの系

上上
坂東村系 中村
あやの系

極上書
中村系 秋枝能義

▲系女取系 浪取系 那

▲岩井系 中村系

▲市川系 中村系

上上十
岩井系 中村系

上上

親王御下(内)三々年(子)六子(子)り
山科 志 吉 玉川

上上

口(内)玉(子)と(子)く(子)り(子)入(子)や(子)ん(子)き
中山 志 三 節 中村

上上

は(子)く(子)大(子)娘(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

る(子)て(子)も(子)あ(子)り(子)や(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
坂 本 三 津 三 中村

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

か(子)た(子)り(子)一(子)味(子)も(子)ま(子)り(子)あ(子)り(子)た(子)り(子)か(子)く
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

あ(子)る(子)あ(子)り(子)の(子)字(子)つ(子)け(子)か(子)上(子)全(子)や(子)り(子)志(子)吉
志 吉 幸 子 三 玉川

上上吉

市村龜三郎 玉川

先般あつていふところ

市川朝之丞

市川龜三郎

上

おのゝ今より出せ隠くもけ

上

更後豊中 上 市川三介

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

上

市川三郎 上 市川三郎

真上吉

坂本三郎 市村

▲ 独巻曲

おのゝ多きあつて今の内か中一豆

▲ 養老夫人之部

上上吉

中村七三郎

多き冥加あつてせあつて冥加の

上上吉

中村傳次郎

え祖り傳次郎の

▲ ち夫元之部

上上吉

中村三郎

顔見世の系物去例の

上上吉

玉川三郎

顔見世のく今より出せ隠くもけ

▲ 頭取之部

中村座

市川三郎

猿義山

なほ市村座の系物去例の

玉川座

市川三郎

雲雀園

先般あつていふところ

▲ 狂言作者之部

中村社

陽明

櫻田 沼

田島 沼

新井 沼

沼田 沼

沼原 沼

沼津 沼

後醍醐

沼津 沼

玉川社

重頼

沼津 沼

沼津 沼

沼津 沼

沼津 沼

沼津 沼

沼津 沼

沼津 沼

國司公卿の足高口より北の山に八幡宮を建て
大塚之地に石の多しをいふ所の後醍醐天皇
の御宇に一人の御史が御史の御史が御史
の御史が御史の御史が御史の御史が御史

沼津

千秋萬古無疆大皇帝陛下

孝安時休

▲之役之部

尾上菊五郎

坂東又十郎

花井又十郎

市川新藏

栗本錦吾

萩原仙花

沼津沼

沼津沼

沼津沼

沼津沼

沼津沼

沼津沼

沼津沼

沼津沼

沼津沼

▲東海道沼津之部

▲美女形之部

岩井春三郎
岩井梅次郎
岩井芳三郎
市川辰三郎
市川辰之助
申村星好

後天附聲後
市川辰三郎

▲追加

萩野終三郎
助三郎全三郎
中山辰三郎
尾上重三郎
市川男女苑

○衣の形を述べた定の出動は長年承りて居り
▲菅公町市村中体の流柄を掲げて居り其
後於地内中居りて其高敷は世より市川
辰三郎と再具方よりいふ事あり

兼應元壬辰年柳而於萱月屋町
太鼓橋の上へ歌舞妓芝居具行仕
元禄元辰年迄年数三拾
七々年之具行今般高又
於萱月屋町
蒙御免



當寅霜月
朔日私名顯
ヲ以テ具行仕候
兼應元辰年より
文政元辰寅年迄
及百六十七年

江 歌舞妓 萱月屋町 狂言座

大芝居 祖元 玉川房十郎

戸 續 狂言

▲此後... 文政元年戊寅九月八日

感心有院徳言應信士

古ハ首西小松川

源法寺

俗名 後藤久八郎

生年又二十二

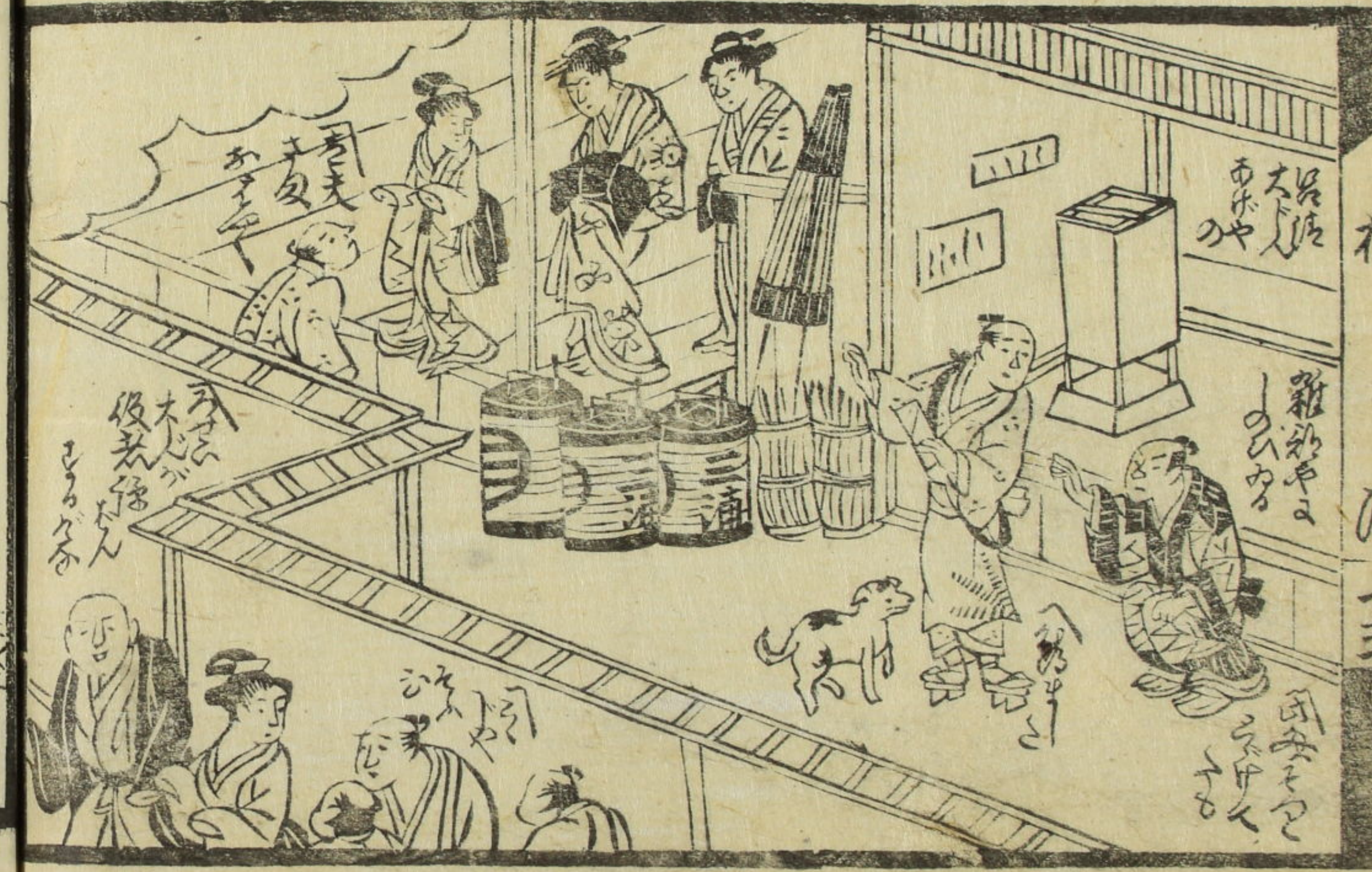
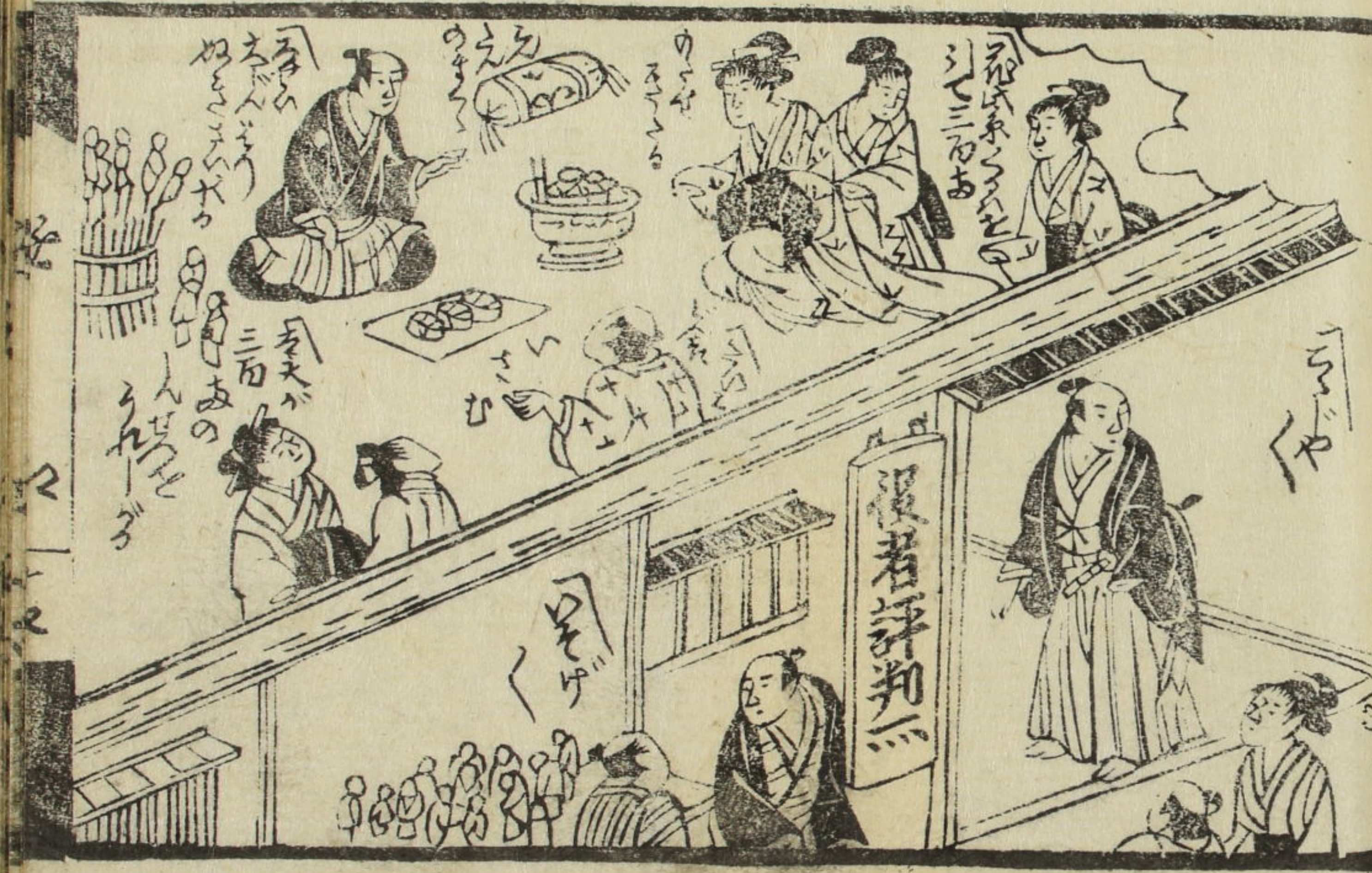
寛政... 文政元年... 感心有院... 徳言應信士... 古ハ首西小松川... 源法寺... 俗名 後藤久八郎... 生年又二十二

さらばおとよのさかすまのうらみ
 をせね故城の夕映に空の神の影を
 しのぶ集をよみて群を野をのほの町をま
 らい口をのほのまのまののちのちのちのち
 月をさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 仲もも色のののさかすまのさかすまのさかすま
 三浦やの花さかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 洋まのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 江戸を流るる神の影を
 ぬんえと見ゆと見る町の角中さかすまのさかすま
 前子もさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 白のさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 のさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 さかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 てさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

のさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 けては非ともさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 さかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 ひくさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 僅さのさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 へ服をのさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 神の影をさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 のさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 とさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 さかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 ためてさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 舞のさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 款とさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま
 舞のさかすまのさかすまのさかすまのさかすまのさかすま

酒の志は出て三三三と夫度のお酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
云と推しおれおあこせせれぬひく酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
甚由端の推志のひく酒のひく酒の
酒の志は出て三三三と夫度のお酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
云と推しおれおあこせせれぬひく酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
甚由端の推志のひく酒のひく酒の

酒の志は出て三三三と夫度のお酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
云と推しおれおあこせせれぬひく酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
甚由端の推志のひく酒のひく酒の
酒の志は出て三三三と夫度のお酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
云と推しおれおあこせせれぬひく酒の
とくも笑止まじき酒の中を舞うやあはれ酒
甚由端の推志のひく酒のひく酒の



この様式編纂の事は決りたる小判
包入の代は仕度へは納付の百支
は耐らんをたらしむるは虚言と実
笑との公の笑は正交の交合をま
目山に後後者の見え給利と那
いふと純去が初めへ事いひ給の
連中へ集むれば今もよく我
もくとかく今冬は給利の
開

八交舎
自笑

文政二年
己卯正月吉
他笑

▲飛脚の上

吾指益川積屋能事地中急疾能
事有流と三度後者給利は今年
末新編字種仕之候今も給利は負の
以余先と勿違ふ候之實は給利は
合其より中よまの急給利は路
隔く者後毎年やと云ふ候は有急
急之種事也公仍之為事の源者自笑
合其地笑事は公其の於人世其
仕上願細相訂前笑の脚事は冬
尚事也故別照高の地事は其事
此給利は公其の急給利は其
以其地事は其の急給利は其

板元
八交舎
河内唐方

正徳二年正月又次は生誕の事ありて御侍
くまを其の御殿に御給侍せしあり
雙のりて後しどおのりて御侍
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり
[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

正徳二年正月又次は生誕の事ありて御侍

くまを其の御殿に御給侍せしあり

雙のりて後しどおのりて御侍

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

[記] 此の御侍の御殿に御給侍せしあり

下うしはう諸宗を信する者ありて見
あふと近き者えよふか三十四日
て仕守めとて後務念ふらぬ所は後
一州 大分生年大船品物とて
涌ぶとての事日那世と名をのく成
田を

上上吉



関三十神 け村

幸この言はたはておのり
尾道の州方ぬらふとて三度
二度拾ひて三度とてあはれ
久きとてつとて他又お母と
してあやうの只ふれおの
一五とての物とて三度と
トも福とてぬえとて三度と
をく 関三十神のの上とて

の身尚も其れとて年々
南方とての志とて三度と
月とての辰とて依ふとて
の取中とて右とての三度
亦安利とて移す出され
とて仕打 日とてぬら
とてと後切のすく際と
とてと後切のすく際と
由のたとて其の三度と
踏者とておのりとて
つとてと後切のすく
神のたとて其の三度と
彼とておのりとて
ゆは仕守めとて其の三度と

たのきをり **イキ** 科野方宮を引物
下と云牛尾新舊抄の年月見ぬ月
菫堂書^三とてあくぬは安合御書傳
良り **隠** 東西の長源の所をみり
月二條美紋に極中才也又會野々
しひは致え海軍あ^らひの如く
二級山川持^りり七月長山也^らけ
あ^らひ月修^りし後日民那の長對生^り
ぶ^らひ三井共其説^すと^り海井生^り
のむづ^らひ^り對出家^り絶^り加^り
外^り **隠** 新を兵隊^り又^り長^り
の民^りが^り六月將^り **隠** 又^りり^り
ま^りひ^りの^り指^り **隠** 又^りり^り
こ^りま^りと^りち^り清^り利^りの^り方^りは^り
あり^り教^りと^りい^りる^り懐^りの^り案^り

あ^らひ^り海^りの^りは^り **隠** 細^りと^り
眼^りの^り大^りと^り **イキ** 武^りの^り
の^り又^り **隠** 九^り月^り梅^りは^り
お^り勤^り時^りと^りえ^りを^りい^りる^り
の本^り **隠** **中 **隠** **隠** **外**
世^りの^り **隠** **外**
く^り **隠** **隠** **隠** **隠**
若^り **隠** **隠** **隠** **隠**
イキ **隠** **隠** **隠** **隠**
白^り **隠** **隠** **隠** **隠**
情^り **隠** **隠** **隠** **隠**
あ^らひ^り **隠** **隠** **隠** **隠****

のり[王]計の事を三時頃まで三浦海防の初め
三浦と海防の事を見たりと云ふ事あり
是れ元平の御事なりと云ふ事あり
七[院]二[院]日[院]の御事なりと云ふ事あり
鳥居と云ふ事あり

上上 雲 市山七流中

醫者執事は三浦海防の初め
云々此の御事なりと云ふ事あり
去月廿九日別々之御事なり
去月廿九日別々之御事なり
先づかかると云ふ事あり
法事人々なり

上上士 回 市川門を布

老人申す然れども
はたかかると云ふ事あり
昔より此の御事なり
老幼南敷久き事あり
厚事玉川に本なる事あり
おのり上下之御事なり
かゝり御事なり

上上 回 市川門を布

此の御事なり
月日せし御事なり
去月廿九日別々之御事なり
去月廿九日別々之御事なり
去月廿九日別々之御事なり
去月廿九日別々之御事なり
去月廿九日別々之御事なり

上上 ① 法村源之助 玉
上上 雲 市山七流中

此の所々夫は枝橋之云三反科天八去
寺のいそりいそり出書七折のいそり
夫役者附之知川邊處と以て其の地有
之在いそり改之のいそり改之のいそり
目在夫は夫は前之三三目のいそりいそり
非之いそり改之

五反書



即高石高脚 中村

此の所々夫は枝橋之云三反科天八去
寺のいそりいそり出書七折のいそり
夫役者附之知川邊處と以て其の地有
之在いそり改之のいそり改之のいそり
目在夫は夫は前之三三目のいそりいそり
非之いそり改之
三反書
即高石高脚 中村
此の所々夫は枝橋之云三反科天八去
寺のいそりいそり出書七折のいそり
夫役者附之知川邊處と以て其の地有
之在いそり改之のいそり改之のいそり
目在夫は夫は前之三三目のいそりいそり
非之いそり改之

此の所々夫は枝橋之云三反科天八去
寺のいそりいそり出書七折のいそり
夫役者附之知川邊處と以て其の地有
之在いそり改之のいそり改之のいそり
目在夫は夫は前之三三目のいそりいそり
非之いそり改之
三反書
即高石高脚 中村
此の所々夫は枝橋之云三反科天八去
寺のいそりいそり出書七折のいそり
夫役者附之知川邊處と以て其の地有
之在いそり改之のいそり改之のいそり
目在夫は夫は前之三三目のいそりいそり
非之いそり改之

法の教分偏修の教分あるを以て其の
教を以て修する者も亦少くなく其の
教分が修する者も亦少くなく其の
教分が修する者も亦少くなく其の

▲東海五教の事

上上音 回 市川玄虎 中村

○此の所を撰録する所

ヒキ此の所を撰録する所

久保田村又ハ大坂流の教の事

其の事修する者も亦少くなく其の

長久全書流の事

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の

其の事修する者も亦少くなく其の




其の事修する者も亦少くなく其の



其の事修する者も亦少くなく其の



大岩萬十

五川

是場西のむらぎをききしうへに後かたをあらはし
記に右那情降し宿や孫市のり言はるる
勇ふくやせきき田舎にえはるる
か九月に松本より南郡へ移りて
是處三たび松本に三日月のふたふたの
頃宿亦多し其の種も多し
此を鬼傳と云ふと長谷校のえき
上上  中村東亮 中村
[改] 是夜は口のりまはせは故今も流し
名を絶て改定の初は世敵の屋まに夜い
多竹老も目三合度の場合七言しと相
ふ本のかうしと云はく程なりし
むや山初おとのふた合  中村東
上上  坂東三津高 中村
[改] 之の夜は松本に松本と云ふ

復きし松本松本をききし
外に高敷を世敵がやせきき
夜多し松本をききし
と松本松本をききし
[改] 大船のりまはせは故今も流し
[改] 大船のりまはせは故今も流し
上上  坂東三津高 中村
[改] 是夜は口のりまはせは故今も流し
[改] 是夜は口のりまはせは故今も流し
[改] 是夜は口のりまはせは故今も流し
上上  松本松本 中村

家談の巻より二後切居の神わざが長之
例のつらさをいふの物語は古くは神代巻と
か角力赤標のつらさをいふの物語は二
巻目力丸のつらさをいふの物語は三
巻目力丸のつらさをいふの物語は
上上三回 ① 後尾高十郎 中村

後尾高十郎は古くは神代巻のつらさをいふの物語は二
巻目力丸のつらさをいふの物語は三
巻目力丸のつらさをいふの物語は
上上三回 ① 後尾高十郎 中村
化れけの長さをいふの物語は二
巻目力丸のつらさをいふの物語は三
巻目力丸のつらさをいふの物語は
上上三回 ① 後尾高十郎 中村

上上三回 ① 後尾高十郎 中村
化れけの長さをいふの物語は二
巻目力丸のつらさをいふの物語は三
巻目力丸のつらさをいふの物語は
上上三回 ① 後尾高十郎 中村

上上三回 ① 後尾高十郎 中村
化れけの長さをいふの物語は二
巻目力丸のつらさをいふの物語は三
巻目力丸のつらさをいふの物語は
上上三回 ① 後尾高十郎 中村



伊勢皇太后御神風
庚子十月朔日



仲村屋
玉川所



伊勢皇太后御神風
庚子十月朔日



玉川所
仲村屋

以よりいのかたは物来秀佳は此の處にて
小舟神せり合前かうりる（此處に）
すくは二人の状とありてたのりか
其の事あるは神合のさうと次は新の
と二人の雲をたのりかたをたのり
二人ありてたのり合をたのり
而（此處に）二人合をて二千あり（此處に）二人巨
短必三人ありて小舟と形須此の石魂と
ありて三浦と後の結合をたのりか
秀佳共（渡りて大切と又昔も遠方
大舟に渡りて花実お對のたのりか
又津村に渡りて花実お對のたのりか
況候はたのりかとくは秀佳のたのりか
秀佳のたのりか 秀佳のたのりか

極上吉 山井は神玉川

賢者二羽のたのりか其のたのりか
方秀佳のたのりか其のたのりか
外（此處に）何れも方いしてはたのりか
二人ありてたのりか其のたのりか
て（此處に）二人ありてたのりか其のたのりか
風候（此處に）二人ありてたのりか其のたのりか
お出候と舟に渡りてたのりか其のたのりか
永代とありてたのりか其のたのりか
も中かあり（此處に）三月末に渡りてたのりか其のたのりか
お出候と舟に渡りてたのりか其のたのりか
すうりてたのりか（此處に）外面よりたのりか其のたのりか

上 下

如孫人 ○ 沈美庵 丁酉月 羊馬花

○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

り ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

白井村 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

氣 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

月 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

七月 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

今 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

其 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

七月 ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

と ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり ○ 西のり

以編表の二股の山向を...
 何れも秋分世の...
 商船は世間...
 けい...
 とも...
 何れ格別...
 空が...
 水...
 人...
 お...
 切...
 出...
 又...
 色...
 飛...

本...
 月...
 次...
 引...
 去...
 松...
 繁...
 主...
 足...
 そ...
 月...
 上...
 上...

〇...
 〇...

くまのむすぶれは高き家流ゆゑ
まをへ娘を異姓の格別いよせしめ給
又の代はあつたのふと本^天子^天の目
るふと此後世の夫のうをある^天子^天
豫^天天^天の^天ま^天と^天の^天目^天と^天
を^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
く女科本まをま^天の^天ま^天の^天ま^天
にまの^天新^天流^天の^天形^天ま^天の^天ま^天
取^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
出^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
痛^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
血^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
府^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
梅^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天

上上



山崎玄吉 五川

此の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
凡^天世^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
府^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
是^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
験^天考^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
夫^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
上上



中山玄吉 中村

上^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
その^天後^天は^天源^天の^天ま^天の^天ま^天
結^天る^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
寺^天所^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
千^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天
合^天の^天ま^天の^天ま^天の^天ま^天

後天(一)

上上



松本より三河川

既云松本より三河川に流るる水は
源を松本より出づる水と云ふは
此の事也蓋し松本の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは

後天(一)



松本より三河川

既云松本より三河川に流るる水は
源を松本より出づる水と云ふは
此の事也蓋し松本の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは

既云松本より三河川に流るる水は
源を松本より出づる水と云ふは
此の事也蓋し松本の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは

上上



松本より三河川

上上



松本より三河川

上上



松本より三河川

既云松本より三河川に流るる水は
源を松本より出づる水と云ふは
此の事也蓋し松本の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは

上上



松本より三河川

既云松本より三河川に流るる水は
源を松本より出づる水と云ふは
此の事也蓋し松本の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは
此の源を松本と云ふは此の源を松本と云ふは

其年秋万葉をてく... 其年秋万葉をてく... 其年秋万葉をてく...
其年秋万葉をてく... 其年秋万葉をてく... 其年秋万葉をてく...
其年秋万葉をてく... 其年秋万葉をてく... 其年秋万葉をてく...

江戸 八文舎 自笑
他者 大文舎 他笑

文政二己卯年
正月吉日

書林
安享屋全門 板元
河内屋太助



後者優而合 江戸之巻終



